

1. 米作りの基本

美味しい米を確実に作る方法を、土と稲の基本から考えましょう。

特別に旨味のある米を、倒伏や障害無く、持続的に収穫し続ける米作りとして、全国で数多くの農家が毎年、実際に成果をあげている方法を解説します。これは下記の要求を叶える米作りです。

- 美味しい米を収穫できる事。
- 倒伏させない事。
- 毎年、確実に収穫が持続する事。
- 病害に強い事。
- 悪天候の年にも安定した収穫をあげる事。
- 周辺の環境を汚染せず、浄化する事。
- 費用が高すぎない事。
- 施用する肥料・資材が少ない事。
- 米の生育が理解できて、さまざまな状況に対処方法がある事。
- 楽しい農業を営める事。

米作りを支える要素として、3つの視点が重要です。3つだけです。

【1】地力作り

米は地力で作ります。もちろん野菜も地力で作るのですが、水稻では特に、地力の大小が重要です。地力は微生物が作ります。水田の土の中で、どんな微生物がどれだけ働いているかが問題です。

土作りのためにワラや堆肥などを 労力をかけてスキ込んでも、そのままでは かえって土を悪くしてしまうことが多いのです。スキ込んだワラが未分解で、水を張ると浮いて来たり、田植え後に腐敗臭のあるガスの泡が出たりします。ワラや堆肥などは、それ自体が良いのではなく、微生物のエサなのですから、このエサにどんな微生物がどれだけ繁殖するかが大事なのです。

田圃の土作りには、空気(酸素)のあるところでも、無いところ(湛水下)でも繁殖・活動のできる微生物、すなわち通性菌(通性嫌気性細菌)が必要なのは自明ですから、ラクトバチルス(乳酸菌)が最適です。カビ(好気性菌)で田圃の土作りはできません。むしろ日本のように高温・多湿な環境では、蔓延するカビを抑えるために、ラクトバチルスが必要です。

【2】根を見る

稲の生長を左右する最も大事な部位は根です。土の健康が根をささえ、米作りの成否を決定します。

大切なのは根です。たまにでもよいから、実際の根を見ること。葉よりも根を優先して育てましょう。

【3】カルシウム栄養

水稻を含む あらゆる作物で、最も重視しなければならない栄養素はカルシウムです。カルシウムが効くと、稲の体質は強く、衰弱しなくなり、しかも見事に登熟して、確実に美味しい米を作ります。

この3点が実現されると、以下の栽培が可能になります。

①ワラなどの有機物を活用するので、肥料は必要・最小限に

どんな成分でも過剰に施し続けると、土や作物を傷めてしまいますから、過剰施用をしてはいけません。

稲株とワラが田圃に還元され、土壌微生物がそれを有効化すれば、不足する成分は わずかです。(できればモミガラや米ヌカも田圃に還元した方が良いのですが、その場合は更にこくわずかだけになります。)

また、水に溶けて流入する成分は、一年間の内には多大になります。日本の国土では、ケイ酸は自然流入量が多いので、水稻であっても充分なのです。リン酸も不足しませんし、細菌(バクテリア)が活発に働いていれば、非常に効きやすいものです。

どうしても不足するのは、日本の国土に少ないカルシウムと、流亡・揮散するチッソですから、この2つの栄養素を施します。原則として、他の成分は施さない方が良いでしょう。

②チッソ肥料は、稲の要求時期に応じて施す

稲がチッソを多量に要求する時期は、分げつ盛期と 幼穂形成期です。この2つの時期に穂数と穂重が決まります。

これに合わせて、適期にチッソ肥料を施します。すなわち分げつ肥と穂肥を与え、他の時期には地力チッソの吸収にまかせます。これができると、土壌微生物が地力を十分に蓄えている事が必要です。

もしも適期以外の時期にチッソ肥料を施すと、むしろ悪影響がありますから、元肥や実肥は施さないのです。また、穂肥も、普通とは時期が

違います。

ラクトバチルス(乳酸菌)のような細菌は、誕生(分裂)・死亡を繰り返す速度が速いので、栄養分を循環する力が極めて大きい特長があります。チッソなどの成分を摂取して体内で、アミノ酸などの素晴らしい有機栄養に変えて循環し、これを植物根が吸収するので、硫酸のような無機チッソを施しても、優良な有機肥効となって、稲の健康や成熟・食味が非常に向上します。

③薄蒔き・粗植

稲は本来、周囲が広々と開けていれば、分げつも穂の充実も充分に行なうたくましさを持っているのに、密植してしまうので能力を発揮できないのです。

1本の苗から7本以下の穂しか付けないとすれば、苗や土に問題があるか、密植の弊害です。粗植によって稲本来の力を発揮させるのが、確実に安定した米作りです。

④稲に負担をかけない水管理

稲は本来、水の溜まった淵で生育する植物ですから、田圃を干すと根に大きな悪影響があります。密植による過剰分げつや、元肥による過繁茂をさせない栽培では、中間期に中干し(土用干し)をしなくてよいので、稲の根を傷めることが無いのです。また、登熟期にも無理に乾かすことはなく、必要な水分を補給できます。

